

商品學に就いて

沖 中 忠 一

(一) 緒 言

上阪西三氏が「商學系統諸學科の中、商品學ほど學的體系の整つて居ないものはない」と喝破するのは凡そ全商品學者を代表した聲であろう。斯學體系混沌の因由として同氏は商品なる同一對象の研究に、自然科學の面と社會科學の面との二個の思惟方向があり、前者による物の主體的眞實性に關する研究と後者による物の客觀的眞實性に關する研究との融和の不充分に歸している事も達觀と敬すべきであろう。

凡そ獨立した學たるには其學でなくては他のどの學を以つてしても解明し得ないと云う其學独自の權威を持つていなければならぬ。氏が言う如く、本義も未だ確立されず、範疇如何も宿題のまゝとなつていて論議の歸趨する所も混沌としている。淺學を省すその混沌に眼鼻なきやと展望する次第である。

(二) 商品學は自然科學か社會科學か

此の設問に對しては既に前章上阪氏の詞が半ば答えてゐる。それなのに再び取り上げねばならない程混沌としてゐるのである。此の設問に對して先づ商品學の發祥を回顧したい。

商品學はイタリアの *Buonaféde* が醫藥品(生藥) *Pharmazeutische Warengruppen* に試みた解説を淵源と

商品學に就いて

一四三

するとする説が有力である。彼の解説は時代の進歩と共に品種も増し個々の内容も豊富になつて今日の生薬學 Pharmacologie にまで生長發展した。生薬學は分析化學、藥化學、藥用植物學、衛生化學、裁判化學、調劑學、臟器藥品化學等と共に藥學校に於いては重要な學科である事、商業學校に於いて商品學が重ぜられる以上である。現在の生薬學では個々の生薬の一一に就いて、使用の來歴、産出狀況、五官による直觀的性狀、顯微鏡的構造、化學成分、應用、貯藏、品種、產地、鑑識、賣買等、賣買其他取扱に必要な諸知識の羅列であつて生薬に關する商品學と云つてよ。斯様に商品學と生薬學とはよく似て居り、生薬學が一世紀以上も先んじているのであるから商品學の淵源をも 1545 年に始つた Buonaféde の *Parmazeutische Warengruppen* の研究に歸せしめようとするのは一應頷ける。しかし商品學を *Pharmakonomie* の引き寫しと見る見解には賛成し兼ねる。

Buonaféde から百年餘り後にフランセスに商業取引學とも云うべき學科が起り

²⁾ Jacques Savary : *Le departait négociant ou in struction générale pour ce qui regarde le commerce de toute sorte de marchandiss*, 1675

なる著書となつて現れ、標題の示す如く、あらゆる種類の商品の賣買に就いての一般知識を収録した商業便覽とも云うべき書物が世に出た。其書の内容には内外商品の解説、荷造法、貯藏法等を記載し、商品中心の商業取引學でもあつたらしく、³⁾ 其後一世紀足らず遅れて、ドイツに

¹⁾ Carl Grünthar Ludvici : *Eröffniete Akademie der Kaufleute order vollständiges Kaufmans-Lexikon 1752-6* が出版された。丁度此の頃はフレデリック大王の治世(一七四〇〜一七八六)の油の乗つて來た頃である。プロシ

2) 水口善三郎 商品概論 昭和10年

3) 水口善三郎 商品概論

ヤは英・佛よりも産業も文化も立ち遅れているし、資源も乏しいのに、何とかして追いつかうと白熱的努力をしてきた頃である。農業・工業を奨励する外、數多の銀行を興し商業にも多大の力を注いだ時代である。フランスから上記商業便覽式商業取引學が傳來し、その刺戟によつてドイツに於ても研究が勃興して、その成果が集成されて Ludvici の Lexikon となつた。Ludvici は商業取引に必要な諸知識を國家の商業政策に關する知識から區別して商業經營・簿記、商品のの三部門を以つて商業學を組み立てた。後世商業學の一分科となつた商品學は實に茲に胚胎したのである。彼の Lexikon は全五巻で、原料品も加工品も可なり詳密に記載されてあつたと云はれる。十七世紀から十八世紀にかけては歐洲では國際商業が勃興した初期であり、殊に新大陸からの珍しい物産が輸入された爲に、未だ見も知らぬ商品に出遇う事が頻繁で、それ等に對する解説の要望ほどの國にもあつたが、新興國ドイツに殊に激しかつたと想はれる。一八世紀の初期に既に

Das in Natur und kunstsachen neuöfene Kaufmans-Magazin

其他數種の商品辭典が出版されてい⁴⁾たと云ふから當時の商品研究熱を察する事ができる。

フレデリック大王の治世も油が乗り切つて、殖産工業・商業が殷賑の度を加えた頃——大王崩御の十年前——Göttingen 大學教授 Johan Beckmann が哲學・財政・經濟に關する蘊蓄の上に農・工業に關する造詣を重ねた廣汎な知識と強い組織力とを以つて、その時まで蓄積された商品知識を検討し集大成して⁵⁾ Warenkunde なる題名の下に一七七六年 Göttingen 大學に於いて開講し、後

Vorberitung zur Warenkunde oder zur Kenntniss Vornehmsten ausländischen Waren, 1793

4) 保田保 理論商品學 略10

5) 水口蒼三郎 商品機構論, 保田榮 理論商品學, 上阪西三 商品學概論, 外數著

Entwurf einer allgemeinen Technologie, 1806

の二書を公にした。彼の開講が大學に於いて商品に就いて講義された最初であつて、彼 Beckmann を商品學の開祖とする。大學に於ける學科として講義したのは彼が開祖であつてもその内容たる知識は彼までの研究者の業績の集積であり、而も商業取引學の中に包含されていたのである。彼が其の集積に補足したであらう加上は認めるとしても全部の知識が彼の研究から湧き出たかの印象を興える言辭は慎まねばならぬと思う。しかし、商業取引學から商品解説の部門を卓抜に取り離して一學科として獨立させた組織力と卓見は敬すべきであり、而も其意圖は充分に汲まねばならない。單なる獨逸的組織癖と看過する事はできないと思う。

Beckmann の晩年の頃はまた顯微鏡は十分に發達してゐなかつた。レンズを組み合せて擴大率を高める事は一七世紀の初頭に知られてはいたが、色收差の爲に解像力がない爲、實用には遠かつた。一八二四年、C. Chevarie が始めてアクロマチックレンズを用いて、今日の顯微鏡に近い物を創製した。その顯微鏡は色收差がないから解像力が強く實用の域に達した。其後、益々改良が加えられて博物學、醫學等に用いられるようになった。自然科學者は茲に強力なる新威力を研究手段に加える事となつた。商品知識と云えば個々の商品一一の性状の觀察から始まり、それが荷造、貯藏、輸送其他取扱に關する心得の基礎となるので、其の觀察の威力を加える事は正に斯學に革命を起す事になる。果して一八六七年、オーストリアに於いて Julius V. Wisner が工業原料の鑑識に顯微鏡を用うべき事を推奨して

Technisches Microscopie, 1867

なる一書を著し、更に六年後には顯微鏡を用いた研究成果

Die Rohstoffess des Pflanzenreihe, 1873

を世に出した。當時は化學がまた搖籃時代に在つたから、商品研究界は顯微鏡の獨壇場の觀があつたであろう。顯微鏡が急激な進歩を遂げるに伴れてオーストリアでは工業原料鑑定が商品研究の主流をなした。二十世紀の初頭には

T. F. Hanausek : Technisches Mikroskopie, 1901

F. R. V. Höbel : Technisches Mikroskopie der Faserstoff, 1905

V. Pösel : Warenkunde ihre Aufgabe und ihre Pflege, 1918

の三名著が世に出された。そして、商品研究界は傳統の Warenkunde に對して顯微鏡觀察を旨とする頑固派が對立した。

十九世紀の後半から化學が急激に發達して分析の術が逐年精緻を加えた。従つて商品の物質的本質を究める道が拓かれたのであつて商品知識の内容に化學的組成が顯微的及五官直觀的所見の錦上に更に花を添える事となつた。斯くて商品學は商品主體の物質的本質を究める目的に對して採用される自然科学的研究の成果が推く累積した。其の爲に商品學は、皮相の見では、また記載の文字量では、自然科学が主位に在るかの觀を呈し、自然科学の素養を持つ者でなくては斯學に手を染め得ない状態となつた。しかし、商品學は商業取引學を母胎して生れ、商業取引を營むのに必要な應用學と云う性格は終始一貫して失うてはならないので、商品學研究は商業取引の立場から自

然科學を驅使する研究でなくてはならない。また商業取引に無關係の自然科學知識は商品學の中に混ぜ込んだならばそれは夾雜知識である。Technisches Mikroskopie 派が Warenkund に對立したと云ふ事實はあつたとしても、それは感情の衝動によつてであつた筈で、所詮は Warenkund に含まるべきである事は云うまでもない。

日本で刊行された商品學教科書を筆者が閱讀丈け列舉すると次の通りである。

戸田 翠 香編	日本商品學	明治二四年
甲斐山留吉著	内外商品學	明治三八年
田所哲太郎著	重要商品學	大正六年
星野太郎著	商品學講義要領	大正一一年
水口善三郎著	最新重要商品學	大正一三年
坂口武之助著	本邦輸出入品詳解	大正一三年
須原伊豫著	商品の知識	大正一五年
野々山清三著	綜合主要材料及び商品知識	昭和二年
林 重吉著	最新商品學精義	昭和三年
坂口武之助著	最近高等商品學	昭和六年
小原龜太郎著	工場材料の管理と商品の検査	昭和七年
南種康博著	商品鑑定法	昭和七年
西衣六八著	最新商品學	昭和七年
河村信一著	商品學要説	昭和八年

保田 榮著	理論商品學	昭和一〇年
佐藤 弘著	商品學概説	昭和一〇年
山口辰雄著	商品研究の基礎	昭和一一年
小原龜太郎著	商品鑑定	昭和一一年
西龜正太著	重要商品地理學	昭和一四年
長谷川繁雄著	統制商品の解説	昭和一四年
濱田長松著	商品學	昭和一五年
河合淳太郎著	高等商品學	昭和一七年
井口豐三郎著	最新實際商品學	昭和四年
和田操一郎著		昭和四年
吉岡幸作著	南方商品學	昭和四年
上阪西三著	商品學概論	昭和二四年

自然科学者である佐藤弘氏が商品學會(更生)第一回總會(昭和二五年四月一五・一六日)で商品學の本質に關する討論に際して、商品學の固有領域の大體七ノ八割は文化科學に屬し、残り二ノ三割は自然科學に屬すると大綱みに述べた。山口辰雄氏が商品學研究の項目として列擧したのを檢討して數え立て、見ると、二二項目中の一七項目が商業學、經濟學、文科學と接觸する事項であつて、各項目の内容並を考慮しないならば七七％は文化科學となつて佐藤氏の大綱な意見を裏書きしている。然るに前記諸教科書の多くは自然科學部門の記載が斷然多く、皮相の見では自然科學書の觀をすら呈する。それら各著者の態度を要約すると大體次の様に察する。

商品學に就いて

一四九

一、西依六八氏を代表とする態度。西依氏は前記著書の緒言に曰く。「重要商品の基礎知識を養い以つて新聞雜誌の經濟欄又は相場表の解説に資し、或は商取引の豫備知識たらしめんとする」と。

二、井口豊三郎、和田操一郎兩氏が代表される態度。前記兩氏の著書の序文に曰く。「工業分析的な専門事項はなるべく斥けて他の専門書に之を譲り、商品製造法の外格付市價商況をも掲げて實際的應用に直ちに役立つように云云」と。

右二つの態度が日本商品學の主流をなして來たかに見えるのは筆者一人のみではなく、大多數の人士をして商品學を應用自然科學と思ひ込ませるに至つた。市價商況の記載と雖もほんの附け足し程度と見られるから。斯る態度が是認されて來た事情は河合淳太郎氏が述る左の詞で釋明されるであらう。即ち

「生産・配給・消費の各過程に互つて技術上及經濟上の特性が攻究されねばならないがすべてを盡す事は小冊子のなし得ない事でもあるし、高等商業學校の一學科としては、經濟・商業・法律の文化諸學科に配當される時間が多く、自然科學或は技術方面の知識の涵養に向けられる時間が極めて少い關係上、商品學としては各商品の生産過程、品位檢定等の技術的部面に重點を置き其缺を補ふ事を重點とする」と。また「女子大學の家政科にある衣料商品學・食料商品學では技術面はいらぬから商業面を強調する。商業學科では經濟方面の事は他の學科できくし、自然科學の方面が弱いから商品學では製造鑑定等の技術面を多く教える」と。蓋し實情をズバリと述べている。

西依氏の態度は、商品を「賣買の對象となる財貨」と字義通り常識的に解釋し、商品學を一つの應用學科として自然科學的構成を中心とする範圍で成立させ、あくまで商業諸學の補助學たらしめようとする謙虛なる態度であつ

7) 河合淳太郎 高等商品學 昭17

8) 學校に於ける商品研究 商品研究 1952. 2. 20.

て、河合氏の考の不言實行である。

上阪氏が⁹⁾理想とする自然科學の面からの主體的眞實性に關する研究と社會科學の面からの客體的現實性に關する研究との統合融和を達する事は少くとも山口辰雄氏が列擧する文化科學・自然科學二つの野に互る二二項目に擴がる研究を解する能力を持つ者ができる事であつて、その能力は人間の學問の大部分を、よし淺くにでも、修得した後に得られる。之は仲々の難事である。斯く大觀した悟りが西依態度を生み、更に鑑識を以つて商品學の本領とする態度すらがでて來たのであろう。

取引の實際に當つては商品鑑識が重大なる問題である。小原龜太郎氏は「商品の數は無限であつても其の性質に何か共通な所があらねばならない。商品學が一種の應用學である以上は初等數學に於ける公理の様な、萬般の商品を鑑定するに共通の法則を求めする必要はない。なるべく多數の商品を鑑識し得るような法則を發見し、これが應用に當つて便宜を得ればそれで充分である」と範圍を鑑定に局限して生涯を捧げられた。商品鑑定の實技には物理學的測定（機械學的測定も）と化學分析とか、直觀（直感に非ず）鑑識の上にある譯で、殊に物質的主體を把握するには化學分析（工業分析）を用いねばならず、分析の實技は數多の機械裝置を用うる上に頗る手の込んだ作業をしなければならぬ。一物質例えば鐵の分析だけでもそれを専門とする技術者を必要とする程なので、賣買に従事する商人が片手間に遂行する事は先ずできない。できる程のチャチな程度では危険を伴う。専門家に依托すべきである。そこで「工業分析的な専門事項はなるべく斥ける」と云う井口・和田兩氏の態度が肯定される。商取引に當つては分析結果を知らせて貰えばよいので、商品知識としては該商品の物質的主體の好ましい成分と思ひべき成分と

9) 上阪西三 商品學概論 昭24

10) 山口辰雄 商品研究の基礎 昭11

11) 小原龜太郎 商品鑑定 昭11

を定性的並に定量的に知つていて、與えられた分析結果から鑑識批判すればよい。但し顯微鏡鑑識、紫外線鑑識の如き簡単な機械と操作でなし遂げ得る鑑識は商取引の片手間仕事となし得るから商品學の内に引き込んでよからう。

河合氏が云う「技術」と云ふ詞を工業技術・農業技術・其他、自然科学の野に展解して見ると次の如き考えが許されるであらう。

宇宙萬物の中で人間の生活欲を満足させ經濟價值があると認められる物としても賣買の對稱になる物としても、商品は動物界・植物界・礦物界に原料の源を發するからその主體的本質を究めるには動物學・植物學・礦物學・化學・物理學等の基礎學から牧畜、水産・農業・林業・鑛業・製造工業全般等の夫々の學・消費の面からは衣食住に關する基礎並に應用の諸學等、自然科学全般に展解される。之等の諸學を一々にその初歩たりとも修得するならば河合式商品學は雲霧消散するように一應は見られる。しかし、仔細に検討するならば、河合式商品學も西依式商品學も素材は自然科学の野から集めた知識であつても、集め方(選び方)配り方に一脈の精神が潜んで居る事が觀取し得られる。素材を自然科学の野から拾い集るとしても、商取引に必要な知識に限られているので、その選定に當つての思惟作業が商品學獨特の行動である。その商品學獨特と茲に云う行動即ち選定原理を單に「商取引に必要な」と常識的に言うに止る處に遺憾があるので、原理は頰冠りのまゝでも、選定結果は充分に役立つているのである。そして商品理會に不必要な知識を含めていないのである。個々の知識の間の脈絡は表面に現はしてなくても、商品學を學ぶ學生は商業學全般に就いても學ぶのであるから、その脈絡は學ぶ者をして學び終つた後に彼等自身の

思惟作業でつけしめようとの企てである。その脈絡をつける事が商品學の本質でもあると思う。

商品學は商業學から分離して獨立の名を建てゝいるが、絶對的な獨立ではない。商業學の内容知識が膨大となつて一人の頭腦に収めて研究を進める事が困難となつたからの分業的獨立である。そこで他の商業學諸分科とのチーフワーク協調行動が必要である。第一商品の定義は商品學が勝手に定めるべきではなく商業學全般から商業學總論の立場から與えらるべきで、商品學者が全商品から抽出した概念で定義したとしても、その研究は商業學總論の立場からしていると見るべきであらう。また分類するにしても動物源商品・植物源商品・礦物源商品とか、或は天産物・工産物とかにする分類は自然科学の領域を出た分類ではない。輸出入稅表・鐵道運賃々率表・船舶運賃々率表・倉敷料表等の分類は商品學の基礎の上に立つてなされるけれども其の分類原理は夫々の學の中にあるので、商品學がするのではなく、商品學は補助學としてそれ等の分類に參與すると見るが至當と思う。

商品學は個々の商品の主體的眞實性（自然科学的）・客觀的現實性（社會科學・人文科學）を研究し、個々に於いての特異性を發見する所に使命があると思う。そして其の個々を見る立場は商業學のすべてに處をかへて立たねばならない。膨大で多くの分科に分れてゐる商業學の各分科盡くの峯に立つ事は一人のなし難い事であるから商品學の分野に於いても幾多の専門に分れるであらう。そして、商品學の内容が記載的分量に於ては自然科学知識が大部分であるにしても、それは物質的主體に就いてゐあつて、社會の物、流通行程に在る物としての眞實性には觸れ得ないのであるから、自然科学的知識は基礎とはなるが資格は補助の役である。日本學術會議も商品學を商業學の一部門としてゐる如く、商品學は自然科学の部門には入り得ない。

(三) 商品學の本質

商品學は個々の商品の主體的眞實性（自然科學的）・客觀的現實性（社會科學的・人文科學的）を研究し、個々に於いての特異性を發見する所に使命があり、その個々を見る立場は商業學盡くの各分科の峯に立たねばならないと前章終りに述べた。また、生産關係・需給關係・經濟價值關係其他經濟學の面から分析した結果でもそれを羅列した丈では自然科學の面からのと同じ資格でしかなく *Warenkunde* の域を出ない事は云ふまでもない。山口辰雄氏が商品研究の項目二二大目の中で自然科學分野に屬する五大目を除いて人文社會科學に屬する項を列舉すると次の通りである。即ち

該商品生産の起源・沿革・變動と動機・生産量・生産額・生産の傾向・生産能力・生産季節・生産統計・生産指數・生産の新興・生産の調節・生産の量に及ぼす內的外的の諸要素。生産取締規則・工業所有權・生産關係稅制免稅・戻稅・稅率。生産費・生産機構・生産費に於ける傾向・市價と生産費との關係・賣價・間接費。生産に於ける金融的特質・特殊金融施設・季節的金融。生産起業・生産組織・生産規模・法定工業主團體。商品交通を起さしむる文化史要因・配給上に於ける現在地位及び將來性・配給と時局との關係。輸送手段・運賃倉敷各種經費火災保險・損害保險・海上保險の對商品的性質・保險料率算定の基礎・特殊保險。商品配給系統・配給の量・商品の種類・配給の人的地理的時機的組織・市場の商品の特質・商品の市場性・商品取引所・取引と商習慣・取引價格・販賣價格・間接費・價格變動・市價・商品相場。商品名・商標・販賣特殊性・販賣用語。商品展示。商品配置・照明・商品小賣・包装の色彩形態・廣告の表示。關稅・稅率・配給上の保護法規・販賣取締法規。用途・

開拓・流行・消費者の民度・消費者の嗜好・商品の代用・撻棄商品の更生・副生物の利用。規格・品位・價格・供給量・供給者・利用率。消費に於ける社會的要望。

等を掲げている。これで大體商品に關係ある諸項を盡しているかに見えるが、この總體は經濟學・商業學・文化諸學科の全般に亘つていてこれ等諸項の研究を商品學の領域とする事は商品學が商業學から分離した主旨に反して逆行して源以上にするかの感がある。山口氏が斯く列擧された意圖は之等諸項目の觀點から商品を見て個々夫々の商品の特異性を發見せよと主張するのではあるまいかと忖度する。經濟學・商業學・文化諸學が之等の項目に就いて理論を展開し法則を得ている。其の學の夫々の場に立つて、自然科學の補助を驅使して個別に商品を見、斯くして得た概念を商業學・經濟學・文化諸學に提供して理論を更に展開せしめ、更に高次の概念を得せしめて更に廣い法則に達せしめるに資する事が筆者が前にチームワークと稱した詞の具體的内容である。そうして、チームのメンバーである各研究者は研究成果を、専門外の研究者に提供するのである事に思を致して、よくダイジェストして出す事が親切であり、チームワークとしての任務でもあらう。

商品學は商業學の一分科であり、社會科學人文科學の立場から自然科學の素養を以つて商品を見た集成である事の特徴とする事は上述の通りとしても、その本領如何の問題が殘されて居る。Beckmann 以來の商品學は工業顯微鏡學、工業分析等の鑑識技術が導入されて以來、個別商品に關する知識は逐年に廣く深くはなつたが、それ等の知識群の羅列、その羅列には一定の秩序と配列原理があるにはあるが、羅列で商品學が組立てられて來た。これに對して近來、羅列の秩序、配列の原理を以つて商品學の本質と認める事に満足しないで、商品學独自の領域を開拓

しなくてはならないとする進歩的な主張をする商品學者が多くなりつゝある。商品學は一補助學であるとしても、一個の學として或立するには商業取引に必要とする商品知識の體系ある集成と云う丈では、學としての存在理由が弱す。Warenkunde が包蔵している自然科学諸知識を教養として持つた商業家は羅列式商品學を學ぶ必要はない。言ひ換えると、自然科学の諸學を漁つて、商取引に必要なだけの諸知識を拾ひ集めると商品學を特に學ばなくともよす。自然科学的教養の廣く商業家には Warenkunde 羅列式商品學は不必要である。何となれば彼等は商業學の素養を以つて、拾ひ集めた自然科学の諸知識を意識してか、或は無意識にか彼の好みに従つて體系付けて彼自身の商取引に役立てるからである。英・米に於いては斯様な態度で Warenkunde 式商品學を遂に立てなかつた。英國でも商品知識に關する著述は頗る澤山ある。個別商品一つ毎に就いての著書も多いし、羅列式著書も古くからある。

Common Commodities of Commerce; by Pitman

Commodities of Commerce; by J. A. Slater (London)

Dictionary of the World's Commercial Product; by J. A. Slater

等の英國著書は Warenkunde ではあるが獨立の學とは認められなくて、Warenkunde に當る英語はなし。英國の此の事實も消極的ながら Warenkunde が獨立學としては存在理由が薄弱である事を語つてゐるであらう。學として成立する爲には他のどの學でも解き明す事のできない領域を本質として持つ事が必要であるが、Warenkunde 従来の商品學には右様の独自の領域が上述の如くになす。そこで輒近に至つて商品學独自の領域を開拓しな

くはならないと云う運動が起つて來た。しかし、茲に大に戒心しなくてはならない事は他の關連學の一部を横領して自己の領域としはならない事で、他のどの學でも解明できないしかも商業取引上必要な商品に關する問題を掘り起して來るのではなくてはいけない。その問題は個別商品の分析でも、一群の商品の個別概念の總體から抽出して立てる法則や假説に關する問題であつてもよい。

水口普三郎¹²⁾氏が個別商品に就いて配給及び市場體系に關する機構を樞軸として商品の本質・評價・鑑定¹²⁾の諸知識を纏めて一つの體系を建て商品機構論と題した。個別商品の一々に就いて配給及び市場體系の面から分析して知り得た夫々の特殊個性を配列した點からは一應 Warenkunde 式商品學と見られるが、個別商品の物質的本質・評價・鑑定等に於ける特異性から因由する配給及び市場體系の特異性を追求したと見ると配給論であつて商品學ではない。商品機構論の題名を興えた理由は茲に在ると忖度する。

本質——物質的本質——は其の商品の利用價值(用途)・貯藏包裝運送の取扱の基礎となる知識であり自然科学で分析される。評價は商業學からなされるが品位が重要な因子である。鑑定は本質の眞偽・品位の格付に關する技術で自然科学の應用である。

品位は銅其他若干の金屬類に見る如く純分率で自然科学的のみで定められる物もあるが酒類のように自然科学的條件の外に社會科學的・人文科學的の要素を條件に加える商品が多い。即ち品位の定義——品位の概念は商業學で扱う事ができても品位を格付する作業は自然科学・社會科學・人文科學の協力に俟たねばできないので、或る一つの商品群の或は一種商品の品位格付の規準を定めるとか、その方法を規定するとかは Warenkunde の場の上に立

つてなす外ない。米・英の如く Warenkunde と繩張りしない國でもその内容は随に持つてゐる。何となれば Warenkunde は必要材料を整備して居り不足があれば其の不充分を調達するからである。

水野良象氏は、商品の品質に基く價格差決定の基準となるべき相對的利用價值を個別商品の一々に就いて科學的に測定する理論と方法とを發見するのが商品學である、と範圍を可なり狭く限定して品位論を商品學の本質にする¹³⁾と主張する。品位格付の原理は上述の如く Warenkunde の上に立たねばならぬので、他のどの學でも解決し得ない問題であつて品位論を商品學の本質とする水野氏の見解は妥當と思う。しかし、品位論以外にも商品に關する問題で Warenkunde の場に立たなくては、他のどの學でも解明し得ない事項は商品學の本質として取り入れてよゝと考ふる。

米國でも英國同様 Warenkunde とか商品學とか商品知識に關して獨立の學科を設けてゐない。従つて商品學に相當する英語がむづかじ¹⁴⁾。Knowledge of merchandise とか Science of merchandise とかの詞はあるが、前者が Warenkunde の直譯であるけれども日本で商品知識とか題する書が概ね通俗的であるし、また独自の領域を持たない現在の日本商品學の内容には Science of merchandise も適うまい。しかし米國に於ても個別商品の解説も豊富であるし、特に一般論に就いては高き水準にある。そして Selling point の發見が商品研究の中心となつてゐる¹⁵⁾。

宇野政雄氏は、Selling point は自然科學的と見られる Suitability, Durability, Versability, Care required の四つの面、人文科學的と見られる Style, Attractiveness, Comfort, Pride of ownership, Price の五つの面、合

13) 水野良象 商品研究 195・3・20, 11・30. 商大論集(神神商科大學)9號 商品學研究4

14) 同志社大學の學科目を U.S.A. に紹介する際に商品學に當る英語に困つた。米人 O. Cary 教授が苦心の末 Analysis of merchandise と造語した。

15) 宇野政雄 アメリカに於ける商品のテキスの紹介 商品學研究(誌)2 昭和26

16) 宇野政雄 商品研究の新方向 同上誌 3 昭26

計九つの面から検討して發見すべきであつて、Warenkunde が發見の役に立つべき¹⁶⁾。Selling point の發見も自然科學と人文科學とを道具に使つてする商品研究であつて、Warenkunde の場に立つてする以外の他の學から得られる成果ではない。今現在の Warenkunde が必要知識を十分に整備してなかつたならば基礎學から調達して來なくてはならぬが、その調達作業が Warenkunde の職分である。従つて、Selling point の發見は宇野氏の云う如く商品學の本質の中に入れねばならぬ。

水野氏は Bying point の基礎研究こそ商品學の最重點であると見て、具體的には品質規格の設定と品質標示の問題を取り上げてゐる。宇野氏が賣り手の論をなすに對して水野氏は買手の側から論じて居るが Selling point は Bying point を目標とするから、水野氏の言う如く兩者は一致しなくてはならぬ。Bying point は買手の個人的色彩が多分にあるから一つに定まる事はないがしかし極端な個人別ではなく共通があると見られるから、最多數人に支持されるのを賣り手は把握して、それを Selling point とする商品を生産する方針を執らねばならぬ。そして Selling point が明瞭に現れるように意匠し設計しなければならぬ。Selling point の發見は Bying point を掴みそれを統計する事である。Bying point もまた宇野氏が言う前記九つの因子から定められると考えられるから兩氏は同じ事と同じ一つ事と知りながら別々の言葉で論じてゐるとしなくてはならぬ。従つて發見の作業に關しては Warenkunde の場に立つて、思惟的には配給論・市場論・統計學の補助を勞作的には配給業者の援助が必要であるが、九つの宇野因子から見ても其他多くの學の援助を必要とするが他のどの學にもない體系が立つのであるから商品學の本質として彈る所はないと信ずる。

尙右等の外に個別商品の相互關連の解析が商品學本質の中に加えられるべきものと信ずる。